

シラチャ校だより

泰日協会学校
シラチャ校
2011, 7, 29



絆を深めた修学旅行

6月22日(水)～24日(金)にかけて、小学部6年生の修学旅行でチェンマイへ引率してまいりました。私自身、初めての経験でしたので、計画立案時、現地の様子など分からないところが多く、日程やしおりの作成、現地校との交流会の交渉など、多くの不安をかかえながらのスタートでした。しかし、心待ちにする子どもたちの姿勢や、準備を頑張る子どもたちの姿勢が、不安を期待へと変えてくれました。

さて、18名の児童は、全ての保護者のお見送りを受けて、一路チェンマイへ向けて出発しました。機内では旅への期待に胸を膨らませ、賑わっていました。

1日目は、エレファントキャンプから。象のショーを見た後、象と戯れる姿は子どもらしい明るさを感じました。象に触れ、その鼻息の大きさや毛深さ、あたたかさを感じ、日本の動物園では味わうことのできない経験ができました。

2日目は、修学旅行のメインイベントでもある交流学習会。現地校と担任との直接打ち合わせは1回のみ。果たしてうまくいくのか…。現地校の厚い歓迎を受け、準備万端の様子でした。ヤ校を大歓迎してくださる姿が見られました。交流活動に入ると、始めは戸惑い気味だった両校の子どもたちも、徐々に慣れてきて、笑顔でコミュニケーションを取り合っていました。最後のバスでの見送りの際には、手をつないで歩く姿も見られ、ほほえましく思いました。担任の不安をよそに、笑顔で活動を展開した子どもたちの、その適応力の速さに驚かされました。

その日の夜は、修学旅行の楽しみでもあるお買い物へ。お互いにどこに何が売っているかの情報交換を行ないながら、また、協力し合い、値段交渉もしながら買い物を進めていく子どもたちにたくましさを感じました。

3日目は、ドイステープ寺へ。300段を越す階段を物ともせず上る子、後から、ゆっくり上る子といろいろいました。頂上の光り輝く、金の仏塔を見て感動した子どもが多かったようです。記念撮影時も互いに寄り添い、笑顔で写真を撮り合っていました。

こうして、3日間の旅行を終えましたが、本学級では、この修学旅行を「最高の思い出にしよう」をスローガンに取り組んできました。ささいなトラブルはあったにせよ、その都度、子どもたちが、スローガンを思い出し、お互いに声をかけ合い、みんなが気持ちのいい、最高の修学旅行になるように頑張りました。その結果、また一步成長したように感じられました。



【ワットドイステープ展望台にて】

今後、学校行事や諸学習活動で、多くの思い出をつくらせてくれるものと期待しています。お互いに思いやりをもち、協力しあい、明るく笑顔あふれる学級づくりをしていきたいと思えます。最後に、本行事を実施するに当たり、保護者の皆様をはじめ、多くの皆様にご支援いただきました。本当にお世話になりました。ありがとうございました。(小学部6年1組 担任 深川 敦史)



【エレファントキャンプにて】



【交流学習会にて】

「たくましさ」は育てられるか…その③

私の大好きな時代劇「水戸黄門」が、今期限りで終了となるそうだ。

確かに今の「水戸黄門」は脚本が下手であり面白くない。でも、ずっと昔のそれは、脚本もそれなりで今見ても良くできていると思えるものが多い。TBS系列で、平日の毎日4時からその再放送がある。これを録画して視るのが、ずっと昔からの私の隠れた楽しみだった。

私の息子などは、「何がそんなに面白いの…」と見向きもしないが、この時代劇には日本人の琴線にふれる何かがあるし、今回のテーマである「たくましさ」を考える上でも参考になることが多くある。

※

実は、毎回の「水戸黄門」の筋立てには、隠れた共通点がある。それは、毎回、必ず、困難な状況の中でも立派にふるまう人物が準主役として登場してくることだ。

それは、ある時は貧乏な浪人とその妻だったり、病氣のおっかさんを助ける物売りの息子だったり、頑固なおとつあんを支える優しい娘だったりする。

彼らが共通して持っているのは、いわゆる「健気(けなげ)」という言葉でくられる立派な心がけや、ものの考え方だ。「水戸黄門」が42年も続いた長寿番組であったのは、日本人の多くがその「健気さ」に感ずるものがあつたから、また、その健気さが報われる最後の結果に喝采したからに他ならない。

※

日本の国が豊になり、生活していくのにあまり困らなくなったのは、歴史上では極めて最近のことだ。江戸も明治も大正も、昭和の初期も、人々の生活はずっと苦しかったはずだ。その苦しさにもかかわらず、まっすぐに生きていこうとする態度を持つ者に対しては、普通の心情を持つ日本

人ならば、誰もが大いに感ずるものがあつたと思う。

そう考えてみれば、「水戸黄門」が視聴率でふるわなくなったのは、そういう心情が日本人の上になつたから、つまり、多くの人は生活面での困難に直面することが少なくなつたから、という現代的事情の故とも言える。

だが、その現代もどんどん変化している。日本の良かった時代は過去のものになりつつあり、国民生活は苦しさを増して行きそうだ。また、それぞれの人が生きていく上で、困難に直面しないことなどあるはずもない。時代がどうであろうと、「たくましさ」を子供に身につけさせる必要性は少しも低くなっていない、と私は思う。

※

①、心がけや態度がしっかりしている様。

②、力の弱い者が困難な状況の中で立派にふるまう様。

「健気(けなげ)」を辞書で引くとそのように書いてある。

これを見ると、これこそ、私たちの校訓「たくましく」そのもの解説ではないかと思ってしまう程だ。

私自身は、たくましい心情に加えて、まっすぐな考え方を持った心根を「健気」と呼ぶのだと思うが、では、どのように子供を育てたら、子供はそのような心情の持ち主になっていくのだろうか。

※

長い間、ドラマを見続けてきた私の見解だが、そうした心情の背景には、自分自身が周囲から受けた深い愛情と自分自身の周りに対する愛情とが必ずある。真理、道理に対する確信的な心情もあるし、そして必ず誰か信頼する人を持っていて、それが肯定的に人生に向かう態度につながっている。

こう考えると、こうした心情の形成は極めて教育的なことで、私たちの日頃の子育てとの関わりが非常に大きいと思えてくる。

ただ、ハングリーなだけで愛情

のない環境からは、まっすぐな気持ちは生まれてこないようだ。

私も、青年時代に道をそれた子供の事例のをそここに見てきたが、その多くは、親の態度、周囲の環境がその主因と判断せざる得ない場合が多かった。

これを逆に考えると、家庭の在り方、親の愛情のかけ方などが「たくましさ」の形成に直結しているということはすぐに分かる。

ただ、私たちは、そのことはそうだと感じるし、そのことの正しさは分かるのだけれど、なかなかそのように出来ない、出来ないということも普通の事実だ。

※

そこで、今、言えることは、愛情ある環境の重要性を、改めてお互いに意識してみたいと言うことだ。

私たち教職員について言えば、学校も準家庭と言えるものなので、この中で人への信頼を形成できるかどうかは、「たくましさ」の形成上、大いに重要な要素であると思える。

つまり、私たちが「たくましさ」の育成に本気であるのならば、この学校の中の人間関係を重視して、人への信頼が生ずるような学校の雰囲気やクラスの雰囲気形成していくという努力が欠かせない。

※

私たちの教育目標具現化方策には子供のより良い心情形成に関わるものがいくつもある。

私たち自身、それを見直して、本気度を高め子供に接していくことが、校訓「たくましく」の実現に大いに関係していると改めて思う。

心理学上も子供の「やる気」の背景には、子供の安心、安全があります、と学んだことがある。子供の行く先々に種々の困難があってもそれを乗り越えられるように、今、愛情の豊かさや人への信頼の中で子供を育てる。その重要性を改めて思う。

(校長)